

## 後記

Homeroomという言葉がある。これは、日本では担任の教師と生徒とが語り合う時間、あるいはその場所をさしている。なかなか家庭的な響きがあって、生徒と教師とが温かく交流できそうな感じのする言葉である。

われわれにとって、広瀬研究室という存在はまさにホームルームであったといえよう。自分のデスクがあり、必要な身の回りの品は適当に置いておける研究室は、Homeと呼ぶにふさわしい、生活の拠点といった感覚があったように思う。

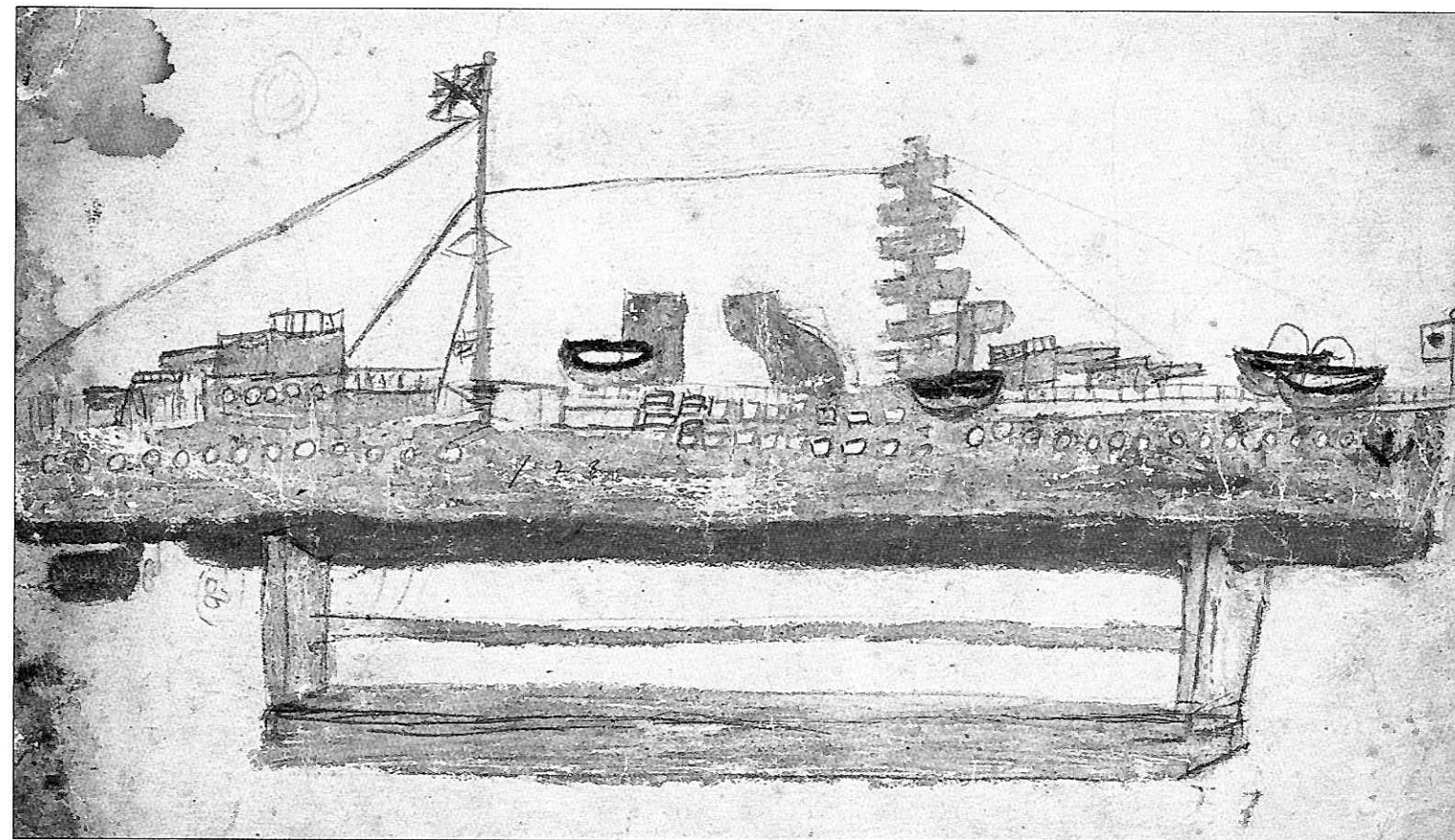
いつも誰かが居て、その気配を感じながら勉強をする、あるいは語り合うことができた。他の先生の講義にもここから教室に「出かけ」、またここに「帰って」くる。家庭でいえばリビングルームのような部屋だった。「個室」は与えられなかったが、その分共同生活の楽しみはあった。なかには半分くらいは「寝室」に使っていた学生もつねにいた。

だが、時は流れ、今やそのHomeがなくなろうとしている。

そこで、何か記念に残しておくべきではないかということになって、この本を出版することにした。しかし、ほんとうに残すべきなのは、このHomeなのではないかと思っている。そして、このホームルームのたいせつさをもっともよく理解していたのは、師広瀬なのだと思う。

しかし、時代は変わり、時は移り行く。いつまでも「武蔵の広瀬研究室」をなつかしがってばかりはいられない。われわれも自身のHomeづくりをせねばならないが、師広瀬には、つぎのHomeづくりを早く進めてもらわねばならない。その新しい広瀬のHomeが、また次ぎの梁山泊たらんことを祈る。

編集委員：松成和夫



### 小学1年のスケッチ

これは広瀬が昭和4年(1929年)市ヶ谷仲之町の市ヶ谷小学校1年生のときに描いた「ゲンカン」。鉛筆描きの線を基調にした下絵にクレヨンで彩色してある。紙の傷みは三重丸をもらって、1年近くズッと教室に掲示してあったためらしい。これが広瀬の手元に残る現存最古のスケッチである。